

随 想

公益財団法人北九州産業学術推進機構
自動車産業推進部長



フジコー技報第 30 号によせて

畑間 大一郎
Daichirou Hatama

この度、フジコー技報第 30 号に随想を書かせていただく機会をいただき、誠にありがとうございます。

現在、私は、公益財団法人北九州産業学術推進機構において、主に自動車産業に関わる地域の中小企業の皆様をご支援する業務に携わっております。

北九州市役所在職時には、中小企業振興課や雇用政策課で、東京で開催した UI ターンに関する事業や高度外国人材など人材確保に関する事業、そして、当財団では、円筒型太陽光パネルの研究開発に関する国プロ事業、など様々な職場で、フジコー様と接点を持たせていただきました。改めて、地域を牽引する企業として、様々な分野で革新的な挑戦を続けるフジコー様に敬意を表しますとともに、こうしたご縁から、今回、随想執筆のお話をいただいたものと理解しています。

先程、触れましたように、私は、元々、北九州市の職員で、2年前に市から当財団に派遣され、今年の3月に市役所を定年退職し、4月からは、当財団の職員として、引き続き勤務させていただいております。

私の定年と同じくして、フジコー様の技報が第 30 号の節目の年にあたるのも、何かのご縁と考え、今回、市役所に 30 有余年在籍した思い出の断片を随想として、紹介させていただこうと思います。なにぶん、素人の散文となりますことを、あらかじめ、ご容赦いただければと存じます。

市役所の場合、一般的に、3年から5年周期で異動を繰り返します。私も、30数年あまりの在職時に10か所の職場を経験しました。

1987年、市役所に入職し、まず、最初に配属されたのが、当時の経済局貿易課でした。市内企業の海外取引等を支援するのが主な業務でしたが、日々の業務をこなしつつ、西日本国際食品見本市や日韓親善交流フェスティバルといった、西日本総合展示場を使った国際的な大規模イベントも開催するなど、市役所時代で最も多忙な職場でした。

今ではあまり考えられませんが、残業が100時間を超えることもしょっちゅうで、店屋物をみんなで食べながら仕事をこなす日々でした。しかしながら、職場に悲壮感などは一切なく、忙しさを楽しむような、笑いの絶えない、和気あいあいとした雰囲気、今になって思い起こしても、職員同士のつながりが最も深かった職場だったように思います。

特に、日々の忙しさのうっぴんを晴らすように、職場旅行や飲み会では、皆、羽目を外して大騒ぎで盛り上がり、ここでは紹介できないような、今でも、語り継がれ、思い出だけで噴き出してしまう数々のエピソードが残っています。貿易課時代の多くの職員とは、今でも、年賀状のやり取りが続いています。

また、同じ時期には、わっしょい百万夏まつりがはじまり、経済局チームで、奇抜な仮装をして、百万踊りに参加しました。参加団体の中で多分一番の

盛り上がりを見せたほか（あまりのはしゃぎすぎに同じ市の主催者から注意を受けたことも）、経済局で山車をつくり、小倉祇園太鼓にも参加するなど、局全体としても、活気があり、局内の職員の課を超えたつながりも深かった時代でした。私の長い市役所職員時代の中で、最初の職場が、今でも、最も思い出深い職場となっています。

その後、小倉南区役所国保年課を経て配属されたのが、市の外郭団体である、(財)国際東アジア研究センター（現：アジア経済研究所）でした。このセンターは、北九州市がアメリカを代表する大学の一つであるペンシルベニア大学と共同で設立した、東アジア経済の研究機関で環黄海経済圏の提唱などで有名です。私が在籍した当時は、研究成果等を地域企業に還元するための国際会議なども活発に行っており、今では不可能な、日本、中国、韓国、台湾、香港など東アジア地域の財界人が一堂に会し、経済交流のあり方を忌憚なく意見交換する東アジア財界人フォーラム（座長は当時麻生セメントの麻生泰社長）を開催したり、ペンシルベニア大学のビジネススクールであるウォートンスクールの市内経営者向け講座を企画するなど、グローバルな体験をさせていただき、今では、大きな財産となっています。

さらに、北九州市男女共同参画センター事業課、当時の経済文化局農林課を経て、総務省の外郭団体である(財)地域創造（東京）に2年間派遣される機会を得ました。当財団は、全国3000以上ある公共ホールを対象に、公共ホールで行う芸術文化事業を支援するために設立された団体です。私は、コンテンポラリーダンサーを地方のホールに1週間派遣して、地域住民とのワークショップやホールでの公演を行う公共ホールダンス活性化事業を担当し、北海道斜里町、福島県会津若松市、岐阜県多治見市、兵庫県豊岡市など、全国津々浦々の公共ホールを巡業させていただきました。派遣後は、(財)北九州市芸術文化振興財団に戻り、響ホールを拠点に、クラシックの訪問コンサート（小学校等）やホールでの公演の企画を担当しました。特に、地域創造や市芸

文財団にて、ワークショップや訪問コンサートを通してダンスや音楽に直接触れることで、参加者の表情が生き生きと変わっていく様子を間近で接することができ、芸術文化の持つ力を感じることができたのは、かけがえない経験となりました。

市役所時代の後半には、産業経済局中小企業振興課に、私の在職期間としては最も長い5年間、在籍しました。当課では、主に、製造業や建設業の支援を担当させていただきました。当時（今でも）の中小企業は、人材確保が喫緊の課題となっていたため、製造現場で生き生きと働く若手技能者を紹介することで、製造業で働くことの魅力を伝えるゲンバ男子事業や女性技能者の職場環境改善（女性トイレや更衣室等）を促進する職場環境改善助成金、また、事業承継促進事業など、新しい事業の立ち上げを担当することができました。施策に反映させるため、多くの経営者の方にお会いし、現場の声をお聞かせいただきましたが、こうしたネットワークが、現在の職場での活動にも大いに活かされています。

終わりに、現在、北九州産業学術推進機構では、自動車産業の支援に携わっていますが、自動車の電動化など新しい分野でのフジコ様の挑戦に再び関わることができる日を楽しみにしながら、フジコ様の今後ますますのご発展を祈念しています。